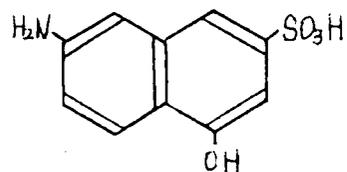


7-アミノ-4-ヒドロキシ-2-ナフタリンスルホン酸の
分解度試験成績報告書 (通称2-アミノ-5-ナフトール-7-スルホン酸)

1. 試験期間 昭和50年10月3日～昭和50年12月20日
2. 試料名 7-アミノ-4-ヒドロキシ-2-ナフタリンスルホン酸
(通称2-アミノ-5-ナフトール-7-スルホン酸)
(試料No K-151)

分子式 $C_{10}H_7NO_4S$

構造式



3. 試験方法及び条件

環保業第5号
業発第615号 } 微生物等による化学物質の分解度試験による
49基局第392号

3.1 試験装置

酸素消費量自動測定機

3.2 酸素消費量測定

3.1の記録による

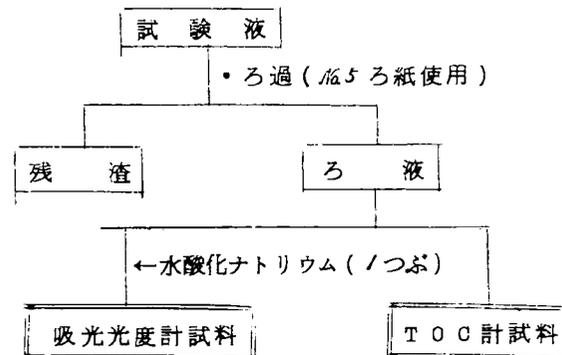
3.3 生分解試験後の直接定量法

(a) 使用分析機器

全有機炭素分析計

紫外可視自記分光光度計

(b) 分析試料の前処理



(c) 分析条件

全有機炭素分析計 (TOC計)

流速 TOC回路 200 ml/min

温度 TOC炉 900℃

紫外可視自記分光光度計 (吸光光度計)

波長 250 nm ~ 370 nm

スリット幅 1 nm

使用セル 石英セル 1 mm

4. 試験結果

	分解度 (%)	付 図	付 表
酸素消費量による結果	6.3	1	—
TOC計による結果	8.4	2	1
吸光光度計による結果	0	3	2

5. その他

本試料は pH の変化により UV パターンが変化する。(図-4 参照)

よつて UV 測定は UV パターンの安定する pH / 2 で測定した。

なお、測定波長は汚泥その他の干渉のない 355 nm を使用した。なお、pH によるパターンの変化は可逆的であり、試料が pH 変化によつて本質的に変化してしまふことはなく、末端基の微小変化に過ぎないものと思われる。従つて分解生成物というべきものが系内に共存するとは考えられず、UV での測定で K-151 を捉えていることは、まちがいないであらう。

以 上